

佳作賞受賞者

積み重ねた月日の重み

大阪文学学校の同志で立ち上げた同人誌「カム」も今年で五年目、現在八号まで発行されています。伝統ある他誌と比べてまだまだ若輩者、それでも代表者、編集者を中心に地道に活動を続け、積み重ねた月日の重みをひしひしと感じております。

今回の作品では、「友達」という関係からは少しはみ出してしまふ女同士の友情、そこには嫉妬や羨望、劣等感が隠されていたり、憎いはずの相手なのに憎みきれなかったりするような、ただの友情では割り切れない関係、言葉では言い表しにくい感情を描きたいと思いました。

まだ書きたいことは確実にあります。「カム」が、広くは同人誌が、この先もずっと続いていくことを願っています。

このたびは佳作に選んでいただきありがとうございます。神戸エルマル文学賞に携わる皆様と、いつもお世話になっているカム同人の仲間に、心より感謝を申し上げます。

佳作賞

「トモダチゴッコ」

「カム」7号

大西智子氏

大西智子（おおにし・ともこ）

（本名・井瀬智子）

一九七九年、大阪府八尾市生まれ。

二〇〇二年、京都光華女子大学人間関係学部人間関係学科卒業。

二〇〇九年、内科医院に就職。

二〇〇〇年から一年間、二〇〇三年から四年間、大阪文学学校に在籍。

二〇〇七年、文芸同人誌「カム」所属。

第二十六回大阪女性文芸賞受賞。

作品概要

美人だが歯に衣着せぬ言動で敵の多い凜子と、プスで根暗なせいで友達のない私。相容れるはずのない二人は高校時代、学校という舞台上で友達という役割を演じるためだけに偽りの友人関係を築く。

高校を卒業してからは疎遠になっていたが、偶然電車の中で再会する。凜子はキャバ嬢に、私は大学四回生になっていた。

私は凜子の相変わらずの口の悪さにうんざりするが、昔から男を見る目がなく、今はヤクザと付き合っているという凜子の幸せそうでない姿に、口では同情しているように装いながらもこっそりほくそ笑む。凜子の毒から身を守るために、彼女の前で決して本音を語らないようになっていった。

私には遼平という、半年前に、生まれて初めてできた彼氏がいた。遼平の部屋で過ごしているとところへ突然凜子から電話がかかってくる。ヤクザの彼氏に殴られたので助けに来てほしい、という。私は凜子の泣きつ面を拝みに行つてやろうとヤクザの部屋に出かける。だがいつもと違う凜子の打ちひしがれた様子を目の当たりにし、私はヤクザと対峙する。二人がかりでヤクザをフライパンで打ちのめすが、凜子の制止によって我に返る。

必死にヤクザを庇う凜子を見て、私は部屋を出る。高校三年生の夏に家出をして、家族のない凜子の家で共に過ごした二週間を回想し、私は彼女の孤独を思い出す。

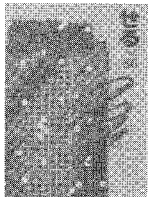
数日後、私と半同棲状態である遼平の部屋に凜子が押しかけてくる。楽しそうに遼平と談笑している凜子の姿を目撃し、私は二人の間にただならぬ空気を感じ取り、遼平を盗られるのではないかと危機感を抱くようになる。疑心暗鬼になった私は二人の関係を疑い始める。

しかし凜子はわざわざ私を呼び出して遼平を口汚く罵る。私は怒りに震えるが、やがて私の抱いている疑いを晴らし、安心させるためにわざと言っているのだという凜子の真意に気づく。

そのとき初めて、「私あんなのこと、大嫌い」と凜子に本音をぶつける。だがどうしても凜子とは分かち合えないのだという事実を改めて知る。



「白鴉」



「せる」



「カム」